

第30回泌尿器科漢方研究会学術集会

会期：2012/04/23 ～ 2012/04/23 会場：パシフィコ横浜(神奈川県)
会長：

誌名：第30回泌尿器科漢方研究会学術集会講演要旨集

Vol : No. Page : 4

発行年：2012

「がん治療・緩和ケアにおける漢方薬の役割と その上手な使い方」

京都府立医科大学附属病院 疼痛緩和医療部
細川 豊史

“がん”は1981年以来、本邦での死亡原因の第一位となっている。これは、結核を始めとする多くの感染症や脳血管障害などによる死亡が減じたことにもよるが、この30年間、“がん”が本邦では最も死に近い病であることは間違いがない。

これに対して、予防、早期診断、治療（手術・化学療法・放射線療法）を主軸に長い戦いが繰り広げられてきたが、残念ながら今もまだその地位に揺るぎはない。平成23年現在、がん患者総数142.5万人、死亡者は年間32.6万人、男性2人に1人、女性3人に1人が“がん”に罹るとされ、3人に1人が、“がん”で死亡している状況である。このような背景から、“緩和ケア”が、“がん”医療の中で必須のものとなってきている。WHOは、2002年に緩和ケアを「延命を目的とした治療とともに“早期”に適用され、QOLを向上させるのみならず疾患の経過そのものにも良い影響を与える」と定義した。本邦の2007年4月施行の“がん対策基本法”第16条でも、がん医療は手術、化学療法、放射線療法、予防、診断、緩和ケアであると定め、その均てん化のための人材育成、基盤整備を行うとともに、がん診断“早期”から痛みの緩和などを目的とする緩和ケアが必要であると明記している。この“早期”からの緩和ケアには、長期の経過の中で生じる痛みを始めとしたさまざまな不快な症状の全人的なコントロールが求められる。このような症状に対して効果があり、副作用の少ない体に優しい漢方薬は、これからの長期に亘る緩和ケアにおいて大いに効果を期待できる。特に、口内炎に対する半夏瀉心湯、吃逆（しゃっくり）に対する芍薬甘草湯、呉茱萸湯、全身倦怠感に対する十全大補湯などは第一選択と考えてもよいし、またCIPN（Chemotherapy Induced Peripheral Neuropathy）に対する牛車腎気丸の有効性の報告も多い。